

## 国際機構による紛争コントロール

——米州機構の事例研究——

黒川修司

### 序言

国際政治学・平和研究の中心テーマの一つである国際紛争に対して、多様のアプローチがなされてきた。紛争の原因<sup>(1)</sup>追求・エスカレーションのメカニズムの究明<sup>(2)</sup>・紛争の終結<sup>(3)</sup>についての研究等があり、又分析方法も歴史<sup>(4)</sup>的・法的・科学的分析等、これも多様性に富んでいる。それだけ国際紛争が、複雑かつ又研究に値する重要な意味を持っているのである。

その中で国際法および国際機構論では、国際機構がいかに国際紛争に介入し、平和的解決をはかってきたかについて、法的には分析されている。紛争研究の視点から

は、余りにも個別事例に重点が置かれていて、体系的研究がなされてきたとは言いがたい。本稿は、国際機構<sup>(5)</sup>がいかに紛争に介入し、これをコントロールしたかについて、行動科学アプローチによって分析することを目的とする。研究全体としては、国際連合<sup>(6)</sup>を含む各種の国際機構の紛争介入を計量分析することが目的であるが、本稿は米州機構の事例に限定したい。本論文は、今後の論文と有機的連関を持つもので、単独論文としては、米州機構の研究ではなく、国際機構全体の研究でもない。中途半端な論文だという批判を覚悟した上で、あえて国際機構論の分野に行動科学アプローチを応用して、この予備的研究を報告するのは、研究テーマの持つ重要性による。米

州機構をケースとして選んだ理由は、まず地域的国際機構として良く機能していること、さらに介入した紛争件数が比較的多いことの二つである。

一 研究史——行動科学研究に限って——

行動科学アプローチの研究として、まずホルスティ教授<sup>(7)</sup>の研究が挙げられるべきであろう。ホルスティの定義する「紛争とは、一ないしそれ以上の政府がその目的を達成または防衛するために武力行使を威嚇し、兵力を動員し、あるいは武力を実際に行使した状況である」<sup>(8)</sup>。彼は大戰間期の紛争と一九四五—六五年に起きた紛争を比較し、争点・紛争の結果・解決手段について差があるかを検討した。主な発見としては、紛争と危機を解決しようとする試みの大多数(七三%)は、二国間交渉と国際機構によるものである<sup>(9)</sup>。国際機構は、紛争解決の場として広く利用されており、計七七の紛争において、解決の試み(一三一)の四八(三七%)が、国際連盟・国際連合・地域的機構によるものであり、成功例は十八(三七%)であった<sup>(10)</sup>。

他にも紛争管理を主題とする研究<sup>(11)</sup>が存在するが、充分

な実証分析にまで至っていない。全体の位置付けがやや異なるが、シンガー教授主宰の「戦争原因」プロジェクトでも、国際戦争と国際組織(IGO)の関係が分析されている<sup>(12)</sup>。

包括的な研究で、私自身がそのデータを実証分析で利用させてもらった、バターワース教授の研究<sup>(13)</sup>について詳しく紹介したい。彼は「紛争管理の諸行動が、間接的であれ直接的であれ、国際平和に寄与しているかどうか体系的実証的に評価されていない」<sup>(14)</sup>と批判し、自分の研究目的は、第二次大戦後の国際機構が、平和実現のために紛争を管理できたかどうか、調べることにある<sup>(15)</sup>、と述べている。彼の定義する紛争とは、「国家間の安全保障をめぐる対立であり、ある国家による他国政府に対する、重大な政治的主張によって発生した、国家間緊張である」<sup>(16)</sup>。彼のデータから除外されているのは、直接国際紛争に結びつかない国内紛争と、「冷戦」のような拡散した対立、又は一般的な国際対立である<sup>(17)</sup>。具体的な紛争事例を分析単位としている点で、伝統的方法に近づいていると言えよう。

彼の定義によるデータには、一九四五—七四年の間に

第1表 介入影響のタイプと程度

影響のタイプ	影響の程度 (%)			計 (N)
	なし	あり	大いにあり	
紛争抑制 (restraint)	61	28	11	310
紛争緩和 (abatement)	63	27	9	310
戦闘停止 (stopping hostilities)	84	13	3	310
拡大阻止 (isolation)	89	8	3	310
紛争解決 (settlement)	79	14	7	310

(Source) Butterworth, I. S. Q., 1978, p. 208, Table 9.

第2表 国際機構の紛争解決能力

機 構	解決能力=単独介入× % %	単独介入× % %	単独介入成功 % %	紛 争 数 N
米 州 機 構	38	49	78	37
国 際 連 合	22	50	45	147
ヨ ー ロ ッ パ 審 議 会	20	30	67	10
ア ラ ブ 連 盟	16	37	43	19
ア フ リ カ 統 一 機 構	10	29	33	21
北 大 西 洋 条 約 機 構	0	18	0	11

(Source) Butterworth, I. S. Q., 1978, p. 211, Table 11.

三一〇の紛争が含まれている。<sup>(18)</sup>興味を引く発見としては、介入があった紛争と介入のない紛争との間に、その属性に差が認められなかった点である。<sup>(19)</sup>紛争に介入したアクターは、国際機構、複数国家、トランスナショナル、個別国家と多様で四五にも上っている。最も活発なアクターは、紛争解決のために設立された、「集団的安全保障」を主任務とする国際機構であった。国連が一二二、米州機構二六、アフリカ統一機構十三、アラブ連盟十六、ヨーロッパ審議会十二と、全体の七一% (二五五の介入例のうちの一八一) を、この五つの機構で占めている。<sup>(20)</sup>他の国際機構は、比較的介入例が少なく、国際司法裁判所が十二例あるが目立つ程度である。若干不思議なのは、トランスナショナルなアクターが、わずか四例しか介入していない点と、個人がそのイニシアティブにもかかわらず、全く登場していない点である。理論的に重要な指摘として、集団安全保障機構と集団防衛機構とICJと国家の四アクターが介入した紛争に、差

(71) 国際機構による紛争コントロール

が認められなかったことを挙げたい。<sup>(21)</sup> 即ち、どのアクターが、どんな紛争に介入するか予想できないということになる。私はこの仮説を反証できるのではないかと考えている。

以上が、国際機構の紛争介入についての簡単な意見であるが、次にその影響力について調べると、全体の四三% (一〇七例) しか、何らかの影響を受けていない。「多くの理由によるが、超大国を含み、冷戦に関係した、イデオロギーが強く働いている紛争は、システム安定に重大な脅威となっており、介入の失敗が目立つ<sup>(22)</sup>」と指摘している。概観すると、国際機構の介入の結果は、期待される程成功していないが、然りとて無視される程失敗ばかりしていない。彼は、「介入者は、直接的というよりむしろ条件を作る影響力を、行使したように思える。<sup>(23)</sup>」と述べている。影響力のタイプと影響力の程度について、具体的な数字は第一表を参照されたい。彼はさらに、国際機構が紛争の単独管理者として適切である度合を示す紛争解決能力 (sufficiency) という指標を作成した。第二表によれば、米州機構が一番紛争解決能力を持っていたが、それでも三八%に止っている。このような成績を

示した米州機構とは、どのような性格を有しているのか次節で簡単に触れたい。

二 米州機構

(The Organization of American States)

米州機構とは、一九四八年四月にコロンビアのボゴタで開催された第九回米州国際会議で採択された、米州機構憲章 (五一年十二月十三日発効) に基づいて設立された、南北両アメリカ大陸の諸国を中心とする、地域的国際組織である。<sup>(24)</sup> その目的は次の五項目である。(憲章第四條) a. この大陸の平和と安全を強化すること。 b. 紛争を起すことのある原因を防止し、かつ加盟国間に起ることのある紛争の平和的解決を確保すること。 c. 侵略の場合に加盟国における共同行動を準備すること。 d. 加盟国間に起ることのある政治的・法律のおよび経済的問題の解決を求めること。 e. 協力的行動によって、加盟国の経済的・社会的および文化的発展を促進すること。より詳細な規定として、一九四八年のいわゆるボゴタ条約 (平和解決に関する米州条約) と、一九四七年の米州相互援助条約が存在する。

高野雄一氏によるとOASは、「地域的な集団保障としての機能が、前節の地域的組織(NATO・EDC・ワルシャワ条約機構・SEATO―黒川)にくらべると相当に維持されているが、同時に自衛権とくに集団的自衛権に基づく防禦同盟的機能が表面に出てくる。とくにアメリカのリーダーシップの下に、中米諸国などに対する共産勢力の進出をもって米大陸の平和に対する脅威とみなすようになってからその傾向が顕著となり、集団的自衛権を拡大解釈し、国連の統制を縮小解釈する米州機構特有の傾向が出ている。<sup>(26)</sup>」

米州機構は、いわばアメリカという巨人と、イスパニア系の開発途上国の多数にのぼる小国とから構成されており、アメリカとラテン・アメリカ諸国との摩擦が一九六〇年代に明瞭になってきた。アメリカのドミニカ干渉、キューバへの干渉は、ラテン・アメリカ諸国のナショナリズムの反発を呼びおこした。

このような米州機構が介入した紛争として、バターワース教授のデータでは二六事例が挙げられているが、紙幅の関係で紛争名と従属変数は付録に記すに止めたい。

### 三 実証分析

序言で述べたように、OASが介入した二六の紛争を個々に分析し描写するという、伝統的方法を取らず、出来るだけ体系的・科学的に分析し、そこから一般的な法則を抽出しようとするのが、本稿の立場である。分析結果の再現を可能とすべく、従属変数は付録に、独立変数名のみだが、第四表として公開する。従属変数(数量化理論の用語では外的基準)は、単一変数にせず<sup>(27)</sup>に紛争コントロールを、次の五つの側面から変数化している。

一、「戦闘停止」二、「紛争緩和」(abatement)当事国の主張の範囲、又は強さを和らげる。三、「拡大阻止」(isolation)紛争の第三国への波及を防ぐ。四、「紛争抑制」(restraint)紛争のエスカレーションを防ぐ。五、「紛争解決」各々の変数について、無し・有りの二分法は避けて、失敗・やや成功・大いに成功・適用不能の四段階区分をしている。<sup>(28)</sup>

次に三四にのぼる独立変数のうち、主要な二五変数を選んだ。各変数(アイテム)がさらに二―八程度のカテゴリに細分されるが、詳しく説明する紙面がないので、

第3表 説明変数とサンプル分布

死者数		紛争拡大の予測		戦闘レベル	
0	11	第3国の介入なし	13	軍事行動なし	5
1—25	7	外交支援	6	戦闘なしの軍事行動	4
26—100	5	兵器供与	7	小軍事行動	14
101—1000	1			大軍事行動	3
1001—2000	1	最強の当事国			
2001—10000	1	弱国	10	パワーの差	
		小国	4	等しい	10
軍事行動の性格		中国	2	やや不平等	7
軍事行動なし	4	大国	1	大変不平等	9
警察行動・占領	11	超大国	9		
軍事力誇示	3			同盟関係	
対決	1	争点タイプ		敵対ブロック	3
非通常戦争	4	国際(冷戦)	3	同一ブロック	18
通常戦争	3	国内(冷戦)	3	ブロック対非同盟	5
		国内(一般)	4		
拡大の程度		植民地	1	大国の利害	
第3国の介入なし	16	国際(一般)	15	なし	4
軍事・外交援助	8			経済的	1
近接国が軍事介入	1	過去の関係		政治・戦略的	21
その他の国が軍事介入	1	紛争なし	5		
		国境紛争	2	OASのバイアス	
イデオロギー		イレレンティズム	0	特にこの事例で有り	8
大いにあり	6	一般的対立	19	一般的に有り	2
ややあり	0			なし	16
なし	20	以前の介入			
		あり	4	行動	
システム区分		なし	22	討論のみ	1
1極('45—47)	0			弱い決議	7
2極('48—55)	9	リーダーシップ		強い決議	2
3極('56—62)	9	1超大国	13	補助的作戦	2
多極('63—75)	8	2超大国	0	非強制作戦	8
		大国	0	強制作戦	6
OASの自主性		中国	0		
高い	16	小国	3		
中程度	1	弱国	9		
低い	9	事務総長	0		
		適用不能	1		

重要な変数についてサンプル分布を見てみたい。(第三表) まず「死者数」をみると、一〇〇人以上の死者を出した紛争は、六〇年と六五年のドミニカ事件とフットボール戦争の三例に過ぎず、比較的紛争度の低い事例が多い。「拡大の予想」は、介入なしと、何らかの型の介入があると予想される紛争とが半々であり、特に偏りは見られない。当事国のパワーを見ると、一番強い国が弱国である場合が十例、超大国(アメリカ)であるケースが九例と、両極端に分離している。紛争当事国の「パワーの差」を調べると、等しい場合が十例、不平等な場合が十六例あるが、これが紛争コントロールに逆効果を与えると予想される。実際に「紛争が拡大した程度」は、第三国の介入がなかったのが十六例、何らかの介入があったのが十例であり、予想よりは介入が少なかったと言えるのではなからうか。「争点タイプ」を見ると、まず国内対国際に区分すると、国内問題が七例、国際問題が十九例で予想通り国際問題が多く、冷戦問題は計六例と意外と少ない。次に「紛争当事国の同盟関係」は、敵対ブロックの紛争が三例しかなく、OASの紛争は同一ブロック内の紛争という性格を示している。「当事国の過去

の関係」は、一般的歴史的対立が十九例と、やはり紛争起源の曖昧さを示しており、国境紛争は一九五九年のハイチとパナマの紛争だけであった。次に「大国の利害」は、ほとんど政治・戦略的利害であり、紛争コントロールの妨害になると予想される。紛争の発生が時代によって変化しているかどうかは、「システム区分」によって一つの判断が下せる。一つの国際政治的時期区分からは、発生は一樣と言えよう。「OASの自主性」は、六二%まで高く、地域的国際機構として自主的に紛争介入したことを裏づけている。

次の「リーダーシップ」というアイテムは注意を要する。原則的に、これ以前のアイテムはゼロ・サンプルがなかったが、このアイテムには、サンプルなしのカテゴリが半数もある。今後の研究で、他の国際機構の事例と比較するために、カテゴリの合併は行なわなかった。そのためサンプルなしのカテゴリの解釈が下しにくい。が、もし有ったならばこの数値になるはずだ、という予想値だと考えて欲しい。「最強の当事国」と同様に、超大国と弱国の二カテゴリに集中している。アメリカの十三例が最高で、米州機構の地域性を明瞭に表わしてい

る。「OASの行動」をみると、活発な介入を反映して、具体的行動が全体の七〇%近くを占めている。

さて以上の二五独立変数と五従属変数との計量分析は不可能なため、まず $\chi^2$ 検定によって少なくとも五%レベル以上で有意な変数を選んだ。 $\chi^2$ 検定の結果が、第四表である。まず、「戦闘停止」と有意であった変数は、「死者数」、「戦闘程度」、「軍事行動の性格」であり、いずれも軍事紛争の性格を表わす変数で、予想通りの結果であった。第二の「紛争緩和」と有意であったのは、「紛争拡大の予想」だけであったが、私の予想とは逆に相関係数は〇・三三四とプラスであった。即ち紛争が外交的介入・兵器供給と拡大していくに従って、紛争国の主張が下っていく。第三の「拡大阻止」と有意だったのは、「紛争拡大の予測」、「争点タイプ」、「当事国の同盟関係」、「イデオロギー紛争」、「OASのバイアス」の五変数であった。第四の「紛争抑制」と有意であったのは、「同盟関係」、「OASのバイアス」の二変数だけであった。最後の「紛争解決」は、どの独立変数とも有意な関係がなかった。意外な程、有意な関係は少なく、総計一二五の組合せで、一%レベル以上が六例（わずかに四・八%）、

五%レベル以上で十三例（十・四%）、本来認めない十%レベルまで拡げても十九例（十五・二%）と、失望の感がある。そこで有意でなかった関係を見ることにした。権力政治で重視される「パワーの差」、「大国の利害」は、 $\chi^2$ 検定で見ると、紛争コントロールと有意な関係はなかった。OASの反応の側面である「自主性」、「介入の時期」、「リーダーシップ」、「一致のレベル」、「行動」も無関係であった。

独立変数の組合せによって、無数の数量化理論<sup>(30)</sup>の分析が可能であるが、本稿では $\chi^2$ 検定で有意であった変数を中心に、理論的に関心がある変数を加えた四―五変数（量的変数とカテゴリーが同じと考えると、十五―二十五変数になる）の分析を行なった。カテゴリーと外的基準に重点を置いたので、重回帰分析のように説明率を最大にする変数を逐次求めることはしなかった。

#### a. 「紛争解決」の数量化理論Ⅱ類分析

$\chi^2$ 検定で有意であった五変数によって、どの程度説明されたか調べたのが、第五表である。外的基準が、解決されず・やや解決された・大いに解決された、の三分類なので、第二次元までの数値が得られた。



第4表 説明変数と外的基準の  $\chi^2$  検定

説明変数	外的基準				
	戦闘停止	紛争緩和	拡大阻止	紛争抑制	紛争解決
死者数	0.1%	×	×	×	×
紛争年数	×	×	×	×	×
紛争拡大の予測	×	5%	0.1%	10%	×
超大国間戦争の予測	×	×	×	×	×
戦闘の程度	1%	×	×	×	×
軍事行動の性格	1%	×	×	×	×
最強の当事国	×	×	×	×	×
パワーの差	×	×	×	×	×
紛争拡大の程度	×	×	5%	×	×
争点のタイプ	10%	×	5%	×	×
当事国の同盟関係	×	×	0.1%	5%	×
人種紛争	×	×	×	×	×
イデオロギー紛争	10%	×	2%	10%	×
当事国の過去の関係	×	×	×	×	×
大国の利害	×	×	×	×	×
システム区分	×	×	×	×	×
OASの以前の介入	×	×	×	10%	×
OASの自主性	×	×	×	×	×
OASのバイアス	10%	×	5%	5%	×
介入の時期	×	×	×	×	×
コントロールの手段	×	×	×	×	×
リーダーシップ	×	×	×	×	×
共同リーダーシップ	×	×	×	×	×
一致のレベル	×	×	×	×	×
OASの行動	×	×	×	×	×

数字は有意水準を表わす。

## (77) 国際機構による紛争コントロール

第5表 II類分析—「紛争解決」

	第1軸(相関比0.819)	第2軸(相関比0.636)
1) 戦闘レベル	レンジ28.5(偏相関0.162)	レンジ0.652(偏相関0.150)
1 軍事行動なし	0.00	0.00
2 戦闘なしの軍事行動	-17.46	0.18
3 小軍事行動	-5.82	-0.24
4 大軍事行動	11.01	-0.47
2) 最強の当事国	レンジ36.4(偏相関0.234)	レンジ1.875(偏相関0.263)
1 弱国	0.00	0.00
2 小国	-12.61	-0.17
3 中国	4.30	-1.47
4 大国	15.80	0.40
5 超大国	23.81	-0.71
3) 争点タイプ	レンジ35.4(偏相関0.231)	レンジ1.712(偏相関0.334)
1 国際(冷戦)	0.00	0.00
2 国内(冷戦)	5.58	0.58
3 国内(一般)	20.13	-0.26
4 植民地	0.83	0.12
5 国際(一般)	35.44	-1.13
4) 大国の利害	レンジ31.4(偏相関0.256)	レンジ1.062(偏相関0.177)
1 なし	0.00	0.00
2 経済的	5.78	0.57
3 政治・戦略的	31.42	-0.50
5) OASの行動	レンジ20.9(偏相関0.193)	レンジ0.757(偏相関0.168)
1 討論のみ	0.00	0.00
2 弱い決議	-17.85	0.31
3 強い決議	-19.81	-0.24
4 補助的作戦	-5.61	0.36
5 非強制作戦	-20.36	0.51
6 強制作戦	0.50	0.50

最大の情報を集約している第一軸は、相関比〇・八一九と、<sup>2</sup>検定では有意でなかった五変数によって良く説明されている。第一軸に効いている要因を、偏相関係数<sup>(3)</sup>によって見ると、「大国の利害」(〇・二五六)、「最強の当事国」(〇・二三四)、「争点タイプ」(〇・二三二)、「OASの行動」、「戦闘レベル」の順であった。この軸の意味を、適中率から見ると、「解決せず」と「やや解決」の判別に八三・三%成功し、「やや解決」と「大いに解決」の判別に八〇・〇%成功しているので、『やや解決—その他』を判別する軸であると解釈できる。カテゴリー値のプラスは、「やや解決」に効き、マイナス値は「解決せず」又は「大いに解決」のいずれかに効いていると考えられる。私はアイテム間の大小関係、即ちどの要因が一番影響力があつたか、よりもカテゴリーの大小・正負関係に注目したい。大規模な軍事行動、一番強い国が中流国以上で、冷戦と関係のない一般の問題で、大国が政治・戦略的利害をもつ紛争は、やや解決されている。OASの行動には、かなりその効果に差が出ている。弱い決議(憲章の枠内で解決するように、又は調停・和解を求めるように呼びかける)と強い決議(フォロー・

アップはないが実質的な決議)と非強制作戦(公式に決議によって設立され、強制権限のない現地作戦員を派遣する)の三行動は、ほぼ同一の数値が与えられており、紛争解決には役立っていない。補助的作戦(決議がなくとも二十人未満の現地作戦員を派遣する)の効果は判定しにくく、討論のみと強制作戦(公式な決議によって設立され、軍事・経済又は政治的制裁を加える権限をもつ作戦)の両極端が紛争の中程度の解決に有効であった。他の国際機関の介入事例でも、同様な結果が得られるかどうか興味がある。

次に第二軸(相関比〇・六三六とまだ高く、充分解釈に耐える)に効いている要因を列挙すると、「争点タイプ」(〇・三三四)、「最強の当事国」(〇・二六三)、「大国の利害」、「OASの行動」、「戦闘レベル」となり、第一軸での「大国の利害」と「争点タイプ」の順序が入れ替っている。この軸の意味をやはり適中率から判定すると、適中率九四・四%と『解決せず—大いに解決した』を判別する軸と理解される。カテゴリー値のプラスは、「解決せず」に、マイナス値は「大いに解決した」に効いていると解釈される。「戦闘レベル」の各カテゴリー

を見ると、見事にランクが付いている。戦闘レベルが高い紛争程、大いに解決されたことを意味しており、これはOASが軍事衝突の紛争に介入し、十分な解決をもたらしたことを示している。第二表のOASの成績を、部分的に立証したと言えよう。最強の当事国が大国である紛争は解決されていない。「争点」では、冷戦とは関係のない、国内・国際問題をめぐる紛争が高度に解決されていたのは、当然であろう。大国の経済的利害が絡む紛争は解決されず、政治・戦略的利害の絡む紛争が十分に解決されているという面白い発見がなされた。これは第一軸での関係をより深めたもので信憑性がある。OASの行動では、強い決議のみが高度な紛争解決を果たしている。第一軸と第二軸との解決に食い違いはなく、重なる部分として、大規模な軍事行動・超大国が当事国で、冷戦ではない争点をめぐり、大国が政治・戦略的利害を持ち、OASが強い決議をした紛争は十分な解決をみたと言えよう。

b. 「紛争緩和」の数量化理論Ⅱ類分析

$\chi^2$ 検定では「紛争拡大の予測」しか有意でなかった。で、その他の変数を任意で選んだ結果、第六表のような

分析が得られた。二つの軸ともに、 $\chi^2$ 検定で唯一の有意な変数だったものが、意外にも一番説明力が弱かった。他の四変数は、多変量解析では有力な説明要因となった訳で、二変数分析だけで発言する危険性を明らかにしている。

まず第一軸は、相関比〇・九六三と極めて高く、適中率は「緩和せず」と「やや緩和した」、「緩和せず」と「大いに緩和した」の判別に一〇〇%成功しており、明らかに「緩和せず—その他」を判別する軸である。この軸に寄与している要因は、「OASの自主性」(〇・五七三)、「一致の程度」(〇・五五三)、「OASの行動」(〇・五二三)、「軍事行動の性格」(〇・五〇三)、「紛争拡大の予測」(〇・四七二)の順で、いずれも極めて高い偏相関係数を示している。特に「軍事行動の性格」と「OASの行動」の単純相関は、各々〇・〇八一とマイナス〇・〇四四であり、多変量解析との差は顕著である。カテゴリー値のマイナスは「緩和せず」と関係があると解される。第三国からの外交的支援が期待され、対決の局面にあり、OASの自主性が中程度以下で、補助的作戦又は強制作戦がとられると、当事国の主張は緩和されて

第6表 II類—「紛争緩和」

	第1軸(相関比0.963)	第2軸(相関比0.768)
1) 紛争拡大の予測	レンジ1.840(偏相関0.472)	レンジ0.103(偏相関0.262)
1 第三国の介入なし	0.00	0.00
2 外交的支援	1.84	-0.09
3 兵器供給	0.23	-0.10
2) 軍事行動の性格	レンジ4.838(偏相関0.503)	レンジ0.696(偏相関0.570)
1 軍事行動なし	0.00	0.00
2 警察行動・占領	0.11	-0.07
3 軍事力の誇示	-0.78	-0.25
4 対決	4.05	0.28
5 非通常戦争	0.91	0.27
6 通常戦争	-0.48	-0.42
3) OASの自主性	レンジ2.190(偏相関0.573)	レンジ0.422(偏相関0.413)
1 高い	0.00	0.00
2 中程度	2.12	0.42
3 低い	2.19	0.07
4) 一致の程度	レンジ2.798(偏相関0.553)	レンジ0.616(偏相関0.562)
1 なし	0.00	0.00
2 狭い	-1.02	-0.27
3 広い	0.24	0.08
4 より広い	-2.56	-0.54
5 適用不能	-2.08	-0.26
5) OASの行動	レンジ2.749(偏相関0.523)	レンジ0.500(偏相関0.510)
1 討論のみ	0.00	0.00
2 弱い決議	-0.38	0.36
3 強い決議	-0.33	0.29
4 補助的作戦	0.62	0.13
5 非強制作戦	-2.13	0.11
6 強制作戦	0.50	0.50

いる。緩和されないのは、軍事力の誇示又は通常戦争で、OASの自主性が高く、非強制作戦がとられた場合であった。

第二軸も相関比〇・七六八と非常に高く、適中率も三つとも似ているが、最大の適中率八八・九%からして『緩和せず—やや緩和した』を判別する軸と解される。この軸の要因は、「軍事行動の性格」(〇・五七〇)、「一致の程度」(〇・五六二)、「OASの行動」(〇・五一〇)、「OASの自主性」(〇・四二三)、「紛争拡大の予測」の順で効いている。相関比は高いが、適中率が全部似た値になっているので、カテゴリー値の読み方は慎重にしたい。主張が緩和されなかったのは、第三国の何らかの介入が予想され、軍事力の誇示又は通常戦争で、OASの自主性が高く、討論のみ又は非強制作戦又は補助的作戦がとられた場合であった。第一軸での解釈と矛盾しない結果である。やや緩和されたのは、「軍事行動の性格」、「OASの自主性」、「一致の程度」、「OASの行動」のいずれにおいても中程度のカテゴリーの場合であった。

c. 「紛争抑制」の数量化理論Ⅱ類分析

第三の数量化理論による分析例として、「紛争抑制」

(紛争のエスカレーションを防ぐこと)の結果である第七表を見てみよう。まず第一軸は、相関比〇・八一九と高く、適中率は「抑制できず」と「やや抑制できた」、

「抑制できず」と「大いに抑制できた」の両方とも八八・九%判別に成功しているので、『抑制できず—その他』を判別する軸と解釈される。この軸に寄与した要因は、「同盟関係」(〇・四八七)、「OASの行動」(〇・四四九)、「OASのバイアス」(〇・四二二)、「紛争拡大の予測」(〇・三〇二)、「以前の介入」の順であった。

単純相関が〇・一八一で $\chi^2$ 検定で有意でなかった「OASの行動」が、他の四変数と一緒になったことで、有力な抑制要因となっている。カテゴリー値のマイナスが「抑制できず」と、プラスがなんらかの抑制に成功に寄与していると考えられる。第三国が兵器を供与しそうな時、当事国が敵対ブロックに属していて、以前にOASが介入しなかった紛争、さらにOASのバイアスが特に有って、行動が中程度である場合には、紛争のエスカレーションを防ぐことができなかった。逆にエスカレーションを押えられたのは、第三国からの外交支援が予想され、当事国が敵対ブロック以外で、OASが以前に介入

第7表 II類分析—「紛争抑制」

	第1軸(相関比0.819)	第2軸(相関比0.687)
1) 紛争拡大の予測	レンジ2.142(偏相関0.302)	レンジ0.496(偏相関0.274)
1 第三国の介入なし	0.00	0.00
2 外交的支援	1.24	-0.41
3 兵器供給	-0.90	-0.50
2) 当事国の同盟関係	レンジ3.852(偏相関0.487)	レンジ0.292(偏相関0.131)
1 敵対ブロック	0.00	0.00
2 同一ブロック	3.85	0.10
3 ブロック・メンバー対非同盟	2.52	-0.19
3) 以前の介入	レンジ1.418(偏相関0.211)	レンジ0.903(偏相関0.441)
1 有り	0.00	0.00
2 無し	-1.42	-0.90
4) OASのバイアス	レンジ3.937(偏相関0.412)	レンジ0.259(偏相関0.151)
1 この場合に特に有り	0.00	0.00
2 一般的に有り	3.94	0.03
3 無し	1.41	-0.23
5) OASの行動	レンジ3.108(偏相関0.449)	レンジ1.204(偏相関0.372)
1 討論のみ	0.00	0.00
2 弱い決議	-2.61	0.21
3 強い決議	-0.89	1.20
4 補助的作戦	-1.71	0.41
5 非強制作戦	-1.08	0.58
6 強制作戦	0.50	0.50

した紛争で、強制作戦又は討論のみの行動がとられた場合であった。第二軸は相関比〇・六八七と精度が高く、適中率が九一・七%と断然他を圧しているの  
で、『大いに抑制できた—その他』を判別する軸と解釈できる。この軸に寄与した要因は、「以前の介入」(〇・四四一)、「OASの行動」(〇・三七二)、「紛争拡大の予測」、「OASのバイアス」、「同盟関係」の順であった。カテゴリー値のプラスが大いに抑制できたに効いていると考

れられる。第三国の介入がないと予想され、OASが以前に介入した経験があり、OASのバイアスが有り、OASの全ての行動(一番有力なのは、強い決議)が、紛争のエスカレーションを大いに阻止できた。

第一軸と第二軸の発見を重ねると、共通点は、OASの以前の介入経験しか残らない。第一軸の関係は、*「やや抑制できた」*と密接な関係であり、第二軸が、*「大いに抑制できた」*に効いていると考えれば矛盾はないのだが。

林式数量化理論第II類による分析は、「戦闘停止」と「拡大阻止」が残っているが、紙幅の関係で省略せざるをえない。又本稿に発表した以外の変数の組合せによる分析も、行なっているが、これも割愛せねばならない。

#### 四 要約と今後の展望

行動科学、特にコンピューターを利用した研究は、とすれば伝統的方法論による研究者からは、従来の研究成果をこえていないと批判されるが、私に言わせれば行動科学に過大な期待をよせている反動である。コンピューターを使ったからと言って、研究視野や理論に重大な変更を加える訳ではなく、従来の伝統的研究が行なっ

きたことを、より大規模に、より精密に、より速く、より科学的に実行しているに過ぎない。ただ量的な研究改善に留まらず、質的な研究改善をもたらすことを忘れてはならない。本稿で終始一貫して利用した数量化理論II類も、コンピューターなしではとても分析不可能であろう。どこまで伝統的研究を乗りこえられたか、常に行動科学者は気にしているが、本研究について言えば伝統的研究では、類似の発想、即ち、国際機構による紛争コントロール、を明示的・体系的に研究した論文は、私見の限りでは存在しなかった。このため比較の対象がなく、研究自体進めにくかった印象を持った。行動科学の定石に従い、研究枠組・変数の定義・データの公表・手法の明確化を、紙面の許す限り明らかにしたので、異論のある方は再分析を試みられたい。

本稿で明らかになった点を要約しておこう。

一、まず説明変数のサンプル分布(第三表)のような極く単純なものでも、それなりに興味深い側面を示している。例えば、パワーについて言えば、不平等の事例が六〇%以上であった。意外に国際冷戦に関する紛争が少ないこと、大国の利害が主として政治・戦略的なものであ



ったことが挙げられよう。OASの自主性が高いこと、行動も具体的行動を多くとっていることが目につく。

二、 $\chi^2$ 検定(第四表)の結果は、余り芳しいものではなかった。各外的基準との関係が強かったのは、「紛争拡大の予測」と「当事国の同盟関係」と「OASのバイアス」の三変数ぐらいいしかなかった。権力政治で重視される変数と、国際機構に期待を寄せる人が重視する変数は、いずれも $\chi^2$ 検定では有意にならなかった。

三、数量化理論II類による分析は、各外的基準ごとに抽出された軸が異なっていた。どのケースも相関比は非常に高く(サンプルが二六と少ないことにもよるが)分析の精度は高い。主たる発見を列挙すると、(一)二変数分析( $\chi^2$ 検定、単純相関)で有意でなかった変数が、II類分析では有力な説明要因になったこと。「大国の利害」が好例である。(二)カテゴリー(大体ランク・オーダーになっている)が予想外に整合性がなかったこと。具体例を挙げると、OASの行った行動の中で、中程度の「強い決議」が紛争を大いに解決し、又エスカレーションの防止に大きく効いていた。必ずしも強力な強制作戦が、一番効果的ではなかった。これは従来考えられていた程

説明変数の作用が単純でなく、いわば非線型の作用をしていたと考えられる。ただし、どのような種類の非線型かは、今後追求する必要がある。

以上のように、国際機構の紛争介入について計量分析をした結果、一定の成果を修めた。国際機構論ならびにOASを研究している方には、計量分析の結果の解釈が不十分だとの印象を与えたことと思うが、現段階では分析結果の提示(fact-finding)に止めておきたい。今後、説明変数の入れ替えは持論、より理論的に関心を引く変数の設定を実行したい。又他の国際機構の事例研究を続けるとともに、バターワース教授が示したように、どのような国際機関がどのような紛争に介入したか、区別できないのかどうか検討したい。

(1) 諸科学からアプローチした例として、マックニール著、千葉正士編訳『紛争の科学—社会的紛争の本質—』一九七〇年、東京創元新社(原著は一九六五年出版) 平和研究の古典としては、Wright, Quincy, *A Study of War* (First Edition 1942, Second Edition 1965), The University of Chicago Press.; Richardson, L. F., *Statistics of Deadly Quarrels*, 1960, The Boxwood Press の二冊が有名である。

- (2) 古典として Richardson, L. F., *Arms and Insecurity: A Mathematical Study of the Causes and Origins of War*, 1960, The Boxwood Press. 軍拡競争の数理分析の要約として Bush, P. A., "Mathematical Models of Arms Races," in Russett, B. M., *What Price Vigilance? The Burdens of National Defense*, 1970, Yale University Press, pp. 193—233. 最近の動向は Zinnes, D. A., *Contemporary Research in International Relations: A Perspective and a Critical Appraisal*, 1976, Free Press 第十四章—第十五章。特に表証分析に優れている Zinnes, D. A. and J. V. Gillespie (eds.) *Mathematical Models in International Relations*, 1976, Praeger と Hollist, W. L. (ed.) *Exploring Competitive Arms Processes*, 1978, Marcel Dekker の所収論文を参照。日本の研究では、山本吉宣「軍備競争」『国際法外交雑誌』第七四巻第五号、一九七六年、五六—一二二頁。山本吉宣「競争拡大の確率モデル」『国際紛争の研究』一九七六年、二七一—四三三頁。拙稿「軍備拡大競争の数学モデル」『平和研究』第三号、一九七八年、一二八—一四二頁。拙稿「A Simple Model of Arms Races: Richardson's Model Revisited。」Paper presented at the Hiroshima Conference of Peace Science Society (International), August 18—19, 1978.
- (3) F. C. イットナー著、桃井真訳『紛争終結の理論』一九七四年、日本国際問題研究所。
- (4) 拙稿「対外紛争の属性理論」『一橋研究』第二九号、一九七五年、一八三—二〇〇頁。「対外紛争の分析」『一橋研究』第三十号、一九七五年、一三三—一四六頁。「国際紛争の計量モデル試論」『一橋論叢』第七五巻第六号、一九七六年、一〇一—一〇七頁。一番包括的な研究として Haas, Michael, *International Conflict*, 1974, Bobbs-Merrill を挙げた。なほ拙稿「書評 Michael Haas 著 *International Conflict*」『国際紛争の研究』一九七六年、一五五—一六〇頁参照。
- (5) 外務省は国際機関、高野雄一氏は国際組織という語を使用しているが、私は国連憲章上の Regional Agencies と規定されているものについては、国際機構、らむを IGO については国際機関の語を使用した。
- (6) 国際機構研究会第十二回研究会(一九七八・十一月九)における報告「国際機構による紛争コントロール」いすれ論文として発表する予定である。
- (7) Holsti, K. J., "Resolving International Conflicts: A Taxonomy of Behavior and Some Figures on Procedures," *Journal of Conflict Resolution*, 1966, Vol. 10 No. 3, pp. 272—296.
- (8) K. J. ホルスティ著、宮里政玄訳『国際政治の理論』一九七二年、勁草書房、六二八頁。ただし宮里教授は、原語の conflict を対立と訳され、dispute を紛争と訳されているが、私は逆にすべきであらうと考える。

- (6) Holsti, K. J., *International Politics: A Framework for Analysis, Second Edition*, 1972, Prentice-Hall, p. 476, Table 15—4.
- (7) *ibid.*, p. 477.
- (8) Bloomfield, L. P. and R. Beattie, "Computers and Policy-making: The CASCON Experiment." *Journal of Conflict Resolution*, 1971, Vol. 15 No. 1, pp. 33—46.; Pelcovitz, N. A. and K. L. Kramer, "Local Conflict and UN Peacekeeping: The Use of Computer Data." *International Studies Quarterly*, 1977, Vol. 20 No. 4, pp. 533—552.; Nye, J. S., *Peace in Parts: Integration and Conflict in Regional Organization*, 1971, Little Brown.
- (9) Wallace, M. and J. D. Singer, "Intergovernmental Organization in the Global System, 1815—1964: A Quantitative Description." *International Organization*, 1970, Vol. 24 No. 2, pp. 239—287.; Singer, J. D. and Michael Wallace, "Intergovernmental Organization and the Preservation of Peace, 1816—1964: Some Bivariate Relationships." *International Organization*, 1970, Vol. 24 No. 3, pp. 520—547. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100. 101. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200. 201. 202. 203. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 213. 214. 215. 216. 217. 218. 219. 220. 221. 222. 223. 224. 225. 226. 227. 228. 229. 230. 231. 232. 233. 234. 235. 236. 237. 238. 239. 240. 241. 242. 243. 244. 245. 246. 247. 248. 249. 250. 251. 252. 253. 254. 255. 256. 257. 258. 259. 260. 261. 262. 263. 264. 265. 266. 267. 268. 269. 270. 271. 272. 273. 274. 275. 276. 277. 278. 279. 280. 281. 282. 283. 284. 285. 286. 287. 288. 289. 290. 291. 292. 293. 294. 295. 296. 297. 298. 299. 300. 301. 302. 303. 304. 305. 306. 307. 308. 309. 310. 311. 312. 313. 314. 315. 316. 317. 318. 319. 320. 321. 322. 323. 324. 325. 326. 327. 328. 329. 330. 331. 332. 333. 334. 335. 336. 337. 338. 339. 340. 341. 342. 343. 344. 345. 346. 347. 348. 349. 350. 351. 352. 353. 354. 355. 356. 357. 358. 359. 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 829. 830. 831. 832. 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840. 841. 842. 843. 844. 845. 846. 847. 848. 849. 850. 851. 852. 853. 854. 855. 856. 857. 858. 859. 860. 861. 862. 863. 864. 865. 866. 867. 868. 869. 870. 871. 872. 873. 874. 875. 876. 877. 878. 879. 880. 881. 882. 883. 884. 885. 886. 887. 888. 889. 890. 891. 892. 893. 894. 895. 896. 897. 898. 899. 900. 901. 902. 903. 904. 905. 906. 907. 908. 909. 910. 911. 912. 913. 914. 915. 916. 917. 918. 919. 920. 921. 922. 923. 924. 925. 926. 927. 928. 929. 930. 931. 932. 933. 934. 935. 936. 937. 938. 939. 940. 941. 942. 943. 944. 945. 946. 947. 948. 949. 950. 951. 952. 953. 954. 955. 956. 957. 958. 959. 960. 961. 962. 963. 964. 965. 966. 967. 968. 969. 970. 971. 972. 973. 974. 975. 976. 977. 978. 979. 980. 981. 982. 983. 984. 985. 986. 987. 988. 989. 990. 991. 992. 993. 994. 995. 996. 997. 998. 999. 1000.

だし、序数尺度の変数を因子分析するという統計学上の無理を犯している。

- (20) *ibid.*, p. 204 Table 6. 同一覧表が載っている。
- (21) *ibid.*, pp. 205—206, Table 7. 判別関数による結果であるが、前述の無理があるので、彼の主張を無批判に受け入れられない。
- (22) *ibid.*, pp. 206—207.
- (23) *ibid.*, pp. 208—209.
- (24) 一九七九年二月現在の加盟国は、アルゼンチン、パルマドス(六七年)、ボリビア、ブラジル、チリ、コロンビア、コス・タリカ、キューバ、ドミニカ、エクアドル、エルサルバドル、グレナダ(七五年)、グアテマラ、ハイチ、ホンジュラス、ジャマイカ(六九年)、メキシコ、ニカラグア、パナマ、パラグアイ、ペルー、スリナム(七七年)、トリニダード・トバゴ(六七年)、USA、ウルグアイ、ベネズエラの計二六カ国である。括弧内の数字は加盟年度を示す。
- (25) 国際連合憲章に規定されている地域的機関 (Regional Agencies) であり、国連との関係が重要であるが、詳しくは高野雄一『国際組織法・新版』一九七五年、有斐閣、第六章を参照。
- (26) 高野雄一、前掲書、四四三頁。
- (27) パターワース教授の場合、変数のラベルが論文によって異なったり、変数を四つにしたりしている。私は五変数を全て利用したい。
- (28) 彼の定義は、国際機構の介入がなかったとしたら、紛争はどうなっていたかを問い、それを従属変数としている。通常の変数定義とは異なるが、ISQ論文で従属変数として利用しているので、私もそれに従う。無理な数量化は避けているが、研究者の判断による区分なので、専門家の批判を受けるべく、付録にこの従属変数データを掲げておく。
- (29) 国力のレベル分けは、GNP・一人当りGNP・人口・核兵器能力・外交的威信の五変数から合成したヤロブセン指標によっている。Cox, R. W. and Harold Jacobsen et al., *The Anatomy of Influence: Decision Making in International Organization*, 1974, Yale University Press, pp. 437—443. 参照。本稿で言う強国・小国等の区別は、全てこれに従う。
- (30) 本稿では数量化理論Ⅱ類を応用した。Ⅲ類を国際政治学に利用した例として、武者小路公秀「政治の言葉と緊張緩和」、『国際緊張緩和の政治過程』岩波書店、一九七〇年、一四五—一八〇頁。猪口孝『国際関係の数量分析』敵南堂、一九七〇年。白井久和「政治のことは」『独協法学』第四号、一九七二年、七五—一一五頁。が内容分析データへ応用している。投票行動データへの応用例は、佐々木伸夫「国連総会における投票行動の分析」『外務省調査月報』第十四巻四号、一九七三年、一一八—一頁。佐藤幸男「南北問題の計量分析による一視角」『外務省調査月報』第十九巻一、一九七八年、一三五—二〇七頁。Ⅱ類の応用は意

外と少なく、大芝亮「国連総会に於ける投票行動のタイポロジー的研究」『一橋研究』第二卷第三号(通卷三七号)、一九七七年、九八一—二四頁。

(31) 佐々木、前掲論文は、レンジを指標にしているが、不正確である。

\* 分析には、一橋大学産業経営研究所の FACOM 230—25 システムを利用した。

\* 大芝亮君(一橋大学大学院博士課程)には、原稿段階でコメントを戴いた、記して感謝したい。

(横浜市立大学講師)

## (89) 国際機構による紛争コントロール

## 付録 紛争データ

紛争名	外的基準				
	1	2	3	4	5
1. Peruvian Boder (1942-60)	4	1	4	1	1
2. Dominican Invasion Attempts (1947-49)	1	1	4	2	1
3. Costa Rica Exiles #1 (1948-49)	4	2	2	2	1
4. Torre Asylam (1948-54)	4	1	4	1	1
5. Dominican Moral Aggression (1949)	4	1	4	2	1
6. Caribbean Plots (1949-50)	4	2	2	2	1
7. Cuban Sailors (1951)	4	3	4	3	3
8. Guatemalan Intervention (1953-54)	1	1	1	1	1
9. Costa Rican Exiles #2 (1955)	3	3	2	3	2
10. Cuban-Dominican Tensions (1956)	4	2	4	2	2
11. Honduran Boder (1957-61)	3	3	4	3	2
12. Haitian Exiles (1959)	4	2	1	1	1
13. Revolutionaries in Panama (1959)	4	3	2	2	3
14. Dominican Tyranny (1959-62)	4	2	2	2	2
15. Nicaraguan Exiles (1959)	1	1	4	1	1
16. Cuban-American Relations (1960-61)	4	1	1	1	1
17. Complaint aggainst Mexico (1961)	4	3	4	3	3
18. Relations with Cuba (1961- )	1	1	1	1	1
19. Lauca River (1962-64)	4	2	4	2	1
20. Intervention in Haiti (1963)	1	3	4	3	1
21. Venezuelan Terrorism (1963-67)	1	1	1	1	1
22. Panama Canal #1 (1964-67)	4	2	2	2	1
23. Dominican Intervention (1965-66)	2	2	2	2	2
24. Bolivian Guerrila Insurgency (1967-68)	1	1	1	1	1
25. American Tuna Boat (1969- )	4	1	4	2	1
26. Football War (1969- )	3	2	2	2	2